

保育所実習が看護学生の子ども観に及ぼす影響

矢田昭子*・笠柄みどり*・吉田由美**

The Influence of Nursing Students' Views of Children on Practical Nursery School

(nursing student / practice training at the nursery school / views of children)

Akiko YATA*, Midori KASAGARA* and Yumi YOSHIDA**

The purpose of the present study is to clarify the influence of nursing students' views of children learning during practical nursery school training.

This study examined the number of siblings students have, their feelings towards children, their image of children, and their learning experience during practical training. There were 47 students who studied practical nursery. Valid responses were obtained from 31 of these subjects.

The results showed that most students had a brother and/or sister. Fifty five percent of the surveyed students have never had contact with children. Students have never had contact with children feelings towards children improved after practical nursery school training. After training, more students responded that children "are fun" and "are active" while fewer responded that children "are selfish", "are noisy", and/or "are insolent". Therefore, their views changed positively. Furthermore, 73.6% of students responded that children "are likeable". Thirty-nine percent of the students stated that they could learn how to make good relations with children during practical nursery school training.

The students could spend a lot of time with children during their training and as a result they could learn more about children. Their practical nursery school experience positively effected their feelings and image toward children. This experience also helped them mature as people.

本研究の目的は、保育所実習が学生の子ども観に及ぼす影響を明らかにすることである。学生の属性、子どもに対する感情、子どものイメージ、子どもの関係性、実習の学びの項目からなるアンケート調査を行った。対象は保育所実習を終了した看護学科3年生47人で31人から有効回答を得た。

その結果、きょうだい数は二人が多く、子どもとの接触経験が「全くない」学生は55%であり、子どもに対する感情は実習前と比べると好転し、特に子どもとの接触経験がない学生は有意に好転していた。

実習前後での子どものイメージでは「おもしろい」「元気」の得点の平均値が有意に高くなり、「わがまま」「うるさい」「生意気」では有意に低下し、マイナスイメージからプラスイメージと変化していた。子どもとの関係性では「かわいい」などの好意的関係性の回答が73.6%を占めた。実習の学びでは子どもとの関わり方が最も多く39%であった。

以上のことから、保育所実習で学生は子どもとの関わりを通して学んだ経験から子どもに対する感情、イメージが好転し、子どもとの関係性の育成につながっており、子ども観を培うことができていた。

はじめに

近年の学生は核家族化、少子化が進み、きょうだい数の減少や地域における子どもの遊び方の変化により、子どもの頃から乳幼児の子どもと実際に触れあう機会

が少ない環境で育っている。そのために病気や障害をもつ子どもを対象にした小児看護学実習では、子どもとの関係づくりに苦手意識を訴える学生も多く見られる。

吉田ら¹⁾は学生の子どもに対する苦手意識は「子どもをどのようにとらえ、どのように対応し、対応しようとしているか」という「子ども観」が影響し、「子ども観」は看護行為を規定する要因の1つと述べている。

島根大学医学部 Faculty of Medicine, Shimane University

*臨床看護学講座 Department of Clinical Nursing

**前臨床看護学講座 Former Department of Clinical Nursing

看護学生の子ども観については、1980年代からすでに研究されてきている²⁾。

岸川らは保育所実習経験の有無によって、子どもへのイメージ、子どもとの関わりの姿勢に差が生じ、保育所実習の有効性を確認している³⁾。教授方法を検討するために、看護学生の保育所実習記録の内容分析を行った研究⁴⁾や同じく保育所実習記録を分析して、基本的な生活習慣に関する学習内容を明らかにした研究⁵⁾がある。また、保育所実習や保育所実習での子ども観や実習のとらえ方の変化を扱った研究が行われている⁶⁻⁸⁾。

看護基礎教育では看護学生が自分の子ども観を培う事が重要であり、保育所実習は子どもと直接に接する体験を通して、子ども観の変容が大いに期待できる場となっている。A大学では保育所実習の目標の第一は「子どもとよりよい関係をもつことができる」を掲げ、その根幹となる子ども観を培うことを重視している。そこで、本稿では保育所実習が学生の子ども観に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。

I. 実習の概要

1. 実習目的

子どもに接する体験を通して、子どもに対する理解を深め、子どもとの関わりについて学ぶ。

2. 実習目標

- 1) 子どもとよりよい関係をもつことができる。
- 2) 子どもの成長発達について理解することができる。
- 3) 子どもの生活習慣を知り、自立への支援の必要性を理解することができる。
- 4) 子ども乳幼児の遊びを知り、その意義を理解することができる。
- 5) 乳幼児の集団生活の場での健康管理について理解することができる。
- 6) 保育所の人的環境、物的環境について理解することができる。

3. 実習方法

学生を2グループに分け、8月前半の2週間の火曜日～金曜日の4日間を1クールとする。3日間は保育所実習を行い、最終日は保育所実習で学んだ内容を共有し、深める目的で学内カンファレンスを実施する。

II. 用語の定義

1. 子ども

子どもとは保育所入所年齢の0～6歳までの乳幼児

とする。

2. 子ども観

子ども観とは「子どもをどのようにとらえ、どのように対応し、対応しようとしているか」とする。今回は子ども観のうち、「子どもに対する感情」「子どものイメージ」「子どもとの関係性」を扱うこととする。

III. 研究方法

1. 対象

小児看護学に関する講義をすべて終了し、保育所実習4日間を履修したA大学看護学科3年生47人。

2. 調査方法

1) 方法

保育所実習の3日間が終了し4日目の学内カンファレンス終了後、対象学生に記名式質問紙による調査を実施した。その後、すでに提出されていた質問紙を学生に返却した上で、研究の協力について口頭と文書で説明した。同意する学生には氏名の部分を切り取ってもらい、回収箱を設置し回収した。

2) 質問紙の内容

(1) 基本属性

きょうだい数、きょうだいの中での順位、子どもとの接触経験とその頻度である。

(2) 子どもに対する感情

実習前後の子どもに対する感情は、「大好き」「どちらかといえば好き」「どちらでもない」「どちらかといえば嫌い」「大嫌い」の5段階評定尺度を用い、それぞれに5～1点の配点とした。

(3) 子どものイメージ

実習前後の子どものイメージについては、釜島ら⁶⁾が作成した「かわいい」「うるさい」「小さい」「無邪気」「生意気」「か弱い」「元気」「おもしろい」「わがまま」「乱暴」の10項目に子どもの特徴である「エネルギー」「成長する存在」の2項目を加え12項目で測定した。それぞれについて「そう思う」「どちらかというそう思う」「どちらかというそう思わない」「そう思わない」の4段階評定尺度を用い、それぞれに4～1点の配点とした。

(4) 子どもとの関係性

子どもとの関係性については、吉田ら¹⁾や草場ら²⁾の調査を参考にし、学生が感じたことを具体的に表現でき、生の印象が表出しやすく、実態に近い結果を得るために文章完成法を用いた。刺激文は「私にとって子どもとは」の1つである。

(5) 保育所実習の学びや感想は自由記述とした。

3. 分析方法

実習前と実習後の子どもに対する感情の程度、子どものイメージの平均値の差の検定にはt検定を用いた。なお、統計解析には統計ソフトSPSS14.0Jを使用し、統計処理において有意水準は5%とした。

子どもとの関係性の項目は刺激文に対して回答として記述された文章を吉田ら¹⁾や草場ら²⁾が行った「好意的関係性」「非好意的関係性」「両価の関係性」「希薄な関係性」「客体化」に分類した。保育所実習の学びについては、文章単位で整理し、それらを類似性に従い分類した。

4. 倫理的配慮

研究の主旨、研究協力は自由意志であること、成績とは無関係であること、協力の有無によって不利益は生じないこと、プライバシー保護等に関する事柄を文書及び口頭にて説明した。なお、本研究は大学看護研究倫理委員会で承認を得た。

IV. 結果

質問紙を提出した47人に研究協力を依頼した結果、

32人から協力が得られ(回収率64.6%), 31名が有効回答であったので分析対象とした。

1. 対象者の属性

きょうだい数は一人っ子6.5%(2人), 2人54.8%(17人), 3人29.0%(9人), 4人9.7%(3人)であり, 2人きょうだいが最も多く, きょうだい数の平均は2.42±0.77人であった。きょうだいの中の順位は第1子48.4%(15人), 第2子41.9%(13人), 第3子9.7%(3人)の順であった。

保育所実習の対象である乳幼児の子どもの接触経験については「全くない」55%(17人), 「今はないが以前あった」32%(10人), 「現在ある」13%(4人)であり, 「今はないが, 以前あった」「現在ある」を合わせると接触経験は45%(14人)であった(表1)。接触経験者14人の接触頻度は「毎日」が2人(14%), 「時々」が6人(43%), 「たまにあった」が6人(43%)であった。

2. 実習前後の子どもに対する感情の変化

実習前後で, 子どもが「大好き」では45.2%(14人)から58.1%(18人), 「どちらかといえば好き」では32.3%(10人)から35.5%(11人)であり, 「大好き」「どちらかといえば好き」を合わせると77.5%(24人)か

表1 学生の属性

| | | 人数 | % |
|-----------|--------------|----|------|
| きょうだい数 | 1人っ子 | 2 | 6.5 |
| | 2人きょうだい | 17 | 54.8 |
| | 3人きょうだい | 9 | 29.0 |
| | 4人きょうだい | 3 | 9.7 |
| きょうだいの順位 | 第1子 | 15 | 48.4 |
| | 第2子 | 13 | 41.9 |
| | 第3子 | 3 | 9.7 |
| 子どもとの接触経験 | 現在ある | 4 | 13.0 |
| | 今はないが, 以前あった | 10 | 32.0 |
| | 全くない | 17 | 55.0 |

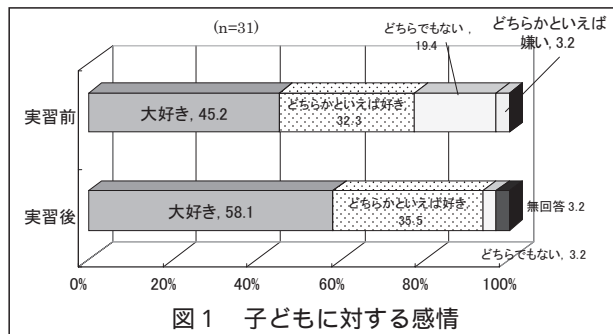


表2 子どもとの接触経験と実習前後の子どもに対する感情の変化 n=31

| 子どもへの感情 | 現在ある (n=8) | | 以前あった (n=10) | | 全くない (n=17) | |
|------------|------------|-----------|--------------|-----------|-------------|-----------|
| | 実習前 (人) | % | 実習後 (人) | % | 実習前 (人) | % |
| 大好き | 2 | 50 | 3 | 75 | 7 | 41 |
| どちらかといえば好き | 1 | 25 | 1 | 25 | 4 | 24 |
| どちらでもない | 1 | 25 | 0 | 0 | 5 | 29 |
| どちらかといえば嫌い | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 6 |
| 大嫌い | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 無回答 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 平均値 標準偏差 | 4.25±0.96 | 4.75±0.50 | 4.50±0.53 | 4.40±0.52 | 4.00±1.00 | 4.59±0.62 |

***p<0.001

ら93.6% (29人)であった。「どちらでもない」では19.4% (6人)から3.2% (1人),「どちらかといえば嫌い」では3.2% (1人)から0% (0人)であった(図1)。実習前に「どちらでもない」と回答した6人のうち5人は実習後に4人が「どちらかといえば好き」、1人が「大好き」に変化していた。「どちらかといえば嫌い」の1人は「どちらかといえば好き」に変化していた。

3. 実習前後の子どもとの接触経験と子どもに対する感情の変化

子どもとの接触経験が「現在ある」の4人は、「大好き」「どちらかといえば好き」を合わせると実習前3人から実習後が4人,「どちらでもない」は実習前1人から実習後0人であった。子どもとの接触経験が「今はないが以前あった」の10人は,実習前後ともに「大好き」「どちらかといえば好き」を合わせると10人全員であった。子どもとの接触経験が「全くない」の17人は,「大好き」「どちらかといえば好き」を合わせると実習前11人(65%)から実習後16人(94%)に増え,「どちらかといえば嫌い」が実習前1人から実習後0人となった。子どもとの接触経験別に子どもに対する感情の平均値を実習前後で比較すると,接触経験が「全く

ない」は実習前4.00±1.00点,実習後4.59±0.62点で有意に増加していた(p<0.001)(表2)。

4. 実習前後の子どものイメージの変化

子どものイメージの各項目の平均値は,実習前で高かった項目は「成長する存在」3.50±0.93点,「小さい」3.45±0.81点,「エネルギー」3.45±0.93点,「元気」「無邪気」ともに3.35±1.02点,「かわいい」3.31±1.00点の順であり,一番低かったのは「乱暴」2.55±0.81点であった。

実習後で高かった項目の平均値は「エネルギー」「成長する存在」が3.61±1.02点,次が「元気」3.58±1.03点,「小さい」3.48±0.77点,一番低かったのは「乱暴」2.521±0.72点であった。

学生の子どものイメージについて実習前後で変化があった項目は「おもしろい」「わがまま」「元気」「うるさい」「生意気」であった。「おもしろい」の項目では「そう思う」の割合が実習前32.3% (10人),実習後64.5% (20人)に変化し,平均値は実習前2.97±0.88点,実習後3.45±0.85点で有意に増加していた(p<0.001)。「わがまま」の項目では「そう思う」の割合が実習前32.3% (10人),実習後16.1% (5人)に変化し,平均値は実習前3.10±0.79点,実習後2.61±0.92点で有意に

表3 実習前後の子どものイメージの変化

| 項目 | 評価 | そう思う (4点) | | どちらかというそう思う (3点) | | どちらかというそう思わない(2点) | | そう思わない (1点) | | 平均値 | 標準偏差 |
|---------------|-----|-----------|------|------------------|------|-------------------|------|-------------|------|------|-------|
| | | 人数 | (%) | 人数 | (%) | 人数 | (%) | 人数 | (%) | | |
| かわいい (n=28) | 実習前 | 17 | 54.8 | 7 | 22.6 | 2 | 6.5 | 3 | 9.7 | 3.29 | ±1.01 |
| | 実習後 | 20 | 64.6 | 4 | 12.9 | 0 | 0.0 | 4 | 12.9 | 3.43 | ±1.07 |
| 無邪気 (n=31) | 実習前 | 20 | 64.5 | 5 | 16.1 | 3 | 9.7 | 3 | 9.6 | 3.35 | ±1.02 |
| | 実習後 | 21 | 67.7 | 6 | 19.4 | 2 | 6.5 | 2 | 6.5 | 3.48 | ±0.89 |
| 元気 (n=31) | 実習前 | 19 | 61.3 | 8 | 25.8 | 0 | 0.0 | 4 | 12.9 | 3.35 | ±1.02 |
| | 実習後 | 26 | 83.9 | 1 | 3.2 | 0 | 0.0 | 4 | 12.9 | 3.58 | ±1.03 |
| おもしろい (n=31) | 実習前 | 10 | 32.3 | 11 | 35.5 | 9 | 29.0 | 1 | 3.2 | 2.97 | ±0.88 |
| | 実習後 | 20 | 64.5 | 6 | 19.4 | 4 | 12.9 | 1 | 3.2 | 3.45 | ±0.85 |
| 乱暴 (n=31) | 実習前 | 4 | 12.9 | 11 | 35.5 | 14 | 45.2 | 2 | 6.5 | 2.55 | ±0.81 |
| | 実習後 | 2 | 6.5 | 14 | 45.2 | 13 | 41.9 | 2 | 6.5 | 2.52 | ±0.72 |
| うるさい (n=31) | 実習前 | 6 | 19.4 | 14 | 45.2 | 9 | 29.0 | 2 | 6.5 | 2.77 | ±0.85 |
| | 実習後 | 5 | 16.1 | 12 | 39.7 | 7 | 22.6 | 7 | 22.6 | 2.48 | ±1.03 |
| 小さい (n=31) | 実習前 | 19 | 61.3 | 8 | 25.8 | 3 | 9.7 | 1 | 3.2 | 3.45 | ±0.81 |
| | 実習後 | 19 | 61.3 | 9 | 29.0 | 2 | 6.5 | 1 | 3.2 | 3.48 | ±0.77 |
| 生意気 (n=31) | 実習前 | 10 | 32.6 | 10 | 32.6 | 9 | 29.0 | 2 | 6.5 | 2.90 | ±0.94 |
| | 実習後 | 6 | 19.4 | 10 | 32.6 | 11 | 35.5 | 4 | 12.9 | 2.58 | ±0.96 |
| か弱い (n=31) | 実習前 | 7 | 22.6 | 13 | 41.9 | 11 | 35.5 | 0 | 0.0 | 2.87 | ±0.76 |
| | 実習後 | 5 | 16.1 | 11 | 35.5 | 13 | 41.9 | 2 | 6.5 | 2.61 | ±0.84 |
| わがまま (n=31) | 実習前 | 10 | 32.3 | 15 | 48.4 | 5 | 16.1 | 1 | 3.2 | 3.10 | ±0.79 |
| | 実習後 | 5 | 16.1 | 13 | 41.9 | 9 | 29.0 | 4 | 12.9 | 2.61 | ±0.92 |
| エネルギー (n=31) | 実習前 | 20 | 64.5 | 8 | 25.8 | 0 | 0.0 | 3 | 9.7 | 3.45 | ±0.93 |
| | 実習後 | 27 | 87.1 | 0 | 0.0 | 0 | 0.0 | 4 | 12.9 | 3.61 | ±1.02 |
| 成長する存在 (n=31) | 実習前 | 20 | 64.5 | 8 | 25.8 | 0 | 0.0 | 3 | 9.7 | 3.45 | ±0.93 |
| | 実習後 | 27 | 87.1 | 0 | 0.0 | 0 | 0.0 | 4 | 12.9 | 3.61 | ±1.02 |

* p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

減少した ($p < 0.01$)。「元気」の項目では「そう思う」の割合が実習前61.3% (19人)、実習後83.9% (26人)に変化し、平均値は実習前 3.35 ± 1.02 点、実習後 3.58 ± 1.03 点で有意に増加した ($p < 0.05$)。「うるさい」の項目では「そう思わない」の割合が実習前6.5% (2人)、実習後22.6% (7人)に変化し、平均値は実習前 2.77 ± 0.85 点、実習後 2.48 ± 1.03 点で有意に減少した ($p < 0.05$)。「生意気」の項目では「そう思う」の割合が実習前32.6% (10人)、実習後19.4% (6人)に変化し、平均値は実習前 2.90 ± 0.94 点、実習後 2.58 ± 0.96 点で有意に減少した ($p < 0.05$) (表3)。

5. 子どもとの関係性

実習終了後の「私にとって子どもとは」の刺激文に対する回答文集数83を5つのカテゴリーに分類した。カテゴリーは【I】で示す。

【好意的関係性】のカテゴリーは61 (73.6%)で、「かわいい存在」「側にいてほしい」「癒される」「子どもがほしい」などであった。【非好意的関係性】のカテゴリーは6 (7.2%)で、「些細な事でも敏感に反応する存在」「関わるのが難しい存在」などであった。【両価の関係性】のカテゴリーは3 (3.6%)で、「わがままだけどかわいい」「疲れるけど癒される」「純粋だからたまにひどいことも言う」などであった。【希薄な関係性】のカテゴリーは7 (8.4%)で、「遠い存在」「未知の存在」などであった。客観的に捉えた【客体化】のカテゴリーは6 (7.2%)で、「常に成長している」などであった (表4)。

6. 実習からの学び

保育所実習についての学びは文脈単位で整理した総数40件を類似性に従いカテゴリー化した結果、次の4カテゴリーに分類された。カテゴリーは【I】で示す。

す。

【子どもへの関わり方】のカテゴリーは16件 (39%)で、「ほめて、認めてあげることが満足感へつながり、さらに自信や意欲へとつながる」「個性に応じた関わり方」「叱り方が難しかった」「私たちの態度や接し方も影響を与える」「家庭での状況が保育所での生活に大きく影響する」「子どもと接する機会が今までほとんどなかったのととても貴重な経験だった」などであった。【子どもの成長発達】のカテゴリーは11件 (28%)で、「発達について教科書でしか知らなかったが、その個人差の大きさや関わり方により発達の促進があることもわかった」などであった。【子どもの特徴】のカテゴリーは11件 (28%)で、「子どもは意外にいろいろ自分でできる」「子どもは嘘つけない、無抵抗、力がない、何でも一生懸命取り組む」「個性が豊か」などであった。【保育士について】のカテゴリーは2件 (5%)で「保育士さんのすごさをまじまじと感じた」「保育士さんは大変」などであった (表5)。

V. 考 察

本研究では保育所実習が学生の子ども観に与えた影響について、実習前後で子どもに対する感情、子どものイメージを比較し、さらに実習後の子どもとの関係性、実習の学びや感想からも検討した。

1. 学生の背景

対象者のきょうだい数は 2.42 ± 0.77 人、9割にきょうだいがあった。学生は子どもの頃からきょうだい間の葛藤、忍耐力、協調性、役割意識をもつことなどさまざまな経験していると考えられる。しかし、学生の子どもとの接触経験は「現在ある」が1割、「全くな

表4 「私にとって子どもとは」の分類 n = 31 (総数83文章)

| 関係性の類型 | 文章数 (%) | 具体的回答内容 |
|---------|-----------|---|
| 好意的関係性 | 61 (73.6) | 可愛い 元気 明るい 側にいてほしい 大切な存在 癒される 子どもがほしい |
| 非好意的関係性 | 6 (7.2) | 敏感に反応 傷つきやすい 関わるのが難しい コミュニケーションが難しい (年齢が低いと) |
| 両価の関係性 | 3 (3.6) | わがままだけどかわいい 疲れるけど癒される 正直で無邪気なので少し怖い存在 |
| 希薄な関係性 | 7 (8.4) | 近いようで遠い存在だった 未知の人間 理解ができていない部分がある |
| 客体化 | 6 (7.2) | 常に成長発達している 思っている以上に自ら成長できる 一番成長する時 |

表5 保健所実習について学びや感想 n=31 (総数40件)

| カテゴリー | 件 (%) | 主な記述例 |
|-----------|---------|---|
| 子どもへの関わり方 | 16 (39) | <ul style="list-style-type: none"> ・ほめて、認めてあげることが満足感へつながり、さらに自信や意欲へつながる ・個性に応じた関わり方 ・叱り方が難しかった ・私たちの態度や接し方も影響を与えるので、普段からきちんとした態度や言葉遣いをしておかないと、いざという時に出てしまう ・家庭での状況が保育園での生活に大きく影響すると感じた ・子どもたちは皆人なつこくて可愛くて、そんな不安は吹き飛んだ ・子どもと接する機会が今までほとんどなかったので、とても貴重な経験だった |
| 子どもの成長発達 | 11 (28) | <ul style="list-style-type: none"> ・発達について教科書でしか知らなかったが、その個人差の大きさや関わり方により発達の促進があることもわかった ・子どもの成長発達は月齢によって大きく違ってくるといふことにとっても驚いた ・具体的な関わり方や各段階の特徴を一通り理解できた |
| 子どもの特徴 | 11 (28) | <ul style="list-style-type: none"> ・子どもは意外にいろいろ自分でできる ・子どもが誰かといたくて寂しい思いをしている ・子どもは嘘つけない、無抵抗、力がない ・何でも一生懸命取り組む ・小さな頃から個性がある |
| 保育士について | 2 (5) | <ul style="list-style-type: none"> ・保育士さんのすごさをまじまじと感じた ・保育士さんに感謝 |

い」が半数以上であり、接触頻度も「時々」「たまにあった」が8割で少なかった。このことから学生の半数以上は、子どもの頃から乳幼児と実際に触れあう機会が少ない環境で育っていることが明らかになった⁹⁾。

2. 実習前後の子どもに対するイメージと感情の変化

子どものイメージでは、実習後「元気」「おもしろい」がさらにプラスイメージに変化し、「わがまま」「生意気」「うるさい」はマイナスイメージからプラスイメージへと変化していることが明らかになった。これは谷本ら¹⁰⁾が報告しているように「実習前は『うるさい・わがまま』という感覚的なイメージで捉えた乳幼児の喜怒哀楽の一部分も、その原因や意味を考へるように変化したことで喜怒哀楽の激しい乳幼児に近づきたくないという学生が減少した」と述べている。本学の学生においても、子どもとの関わり方や子どもの特徴を学びながら実習したことで子どもの喜怒哀楽について意味づけをし、より子どもを理解できるようになったことで子どもとの関わりが容易となり、子どもとの相互作用によって可愛いなどの愛着がわき、変化したと推察される。

子どもに対する感情は「大好き」「どちらかといえば好き」を合わせると実習前は約7割、実習後は9割に好転し、特に子どもの接触経験が「全くない」学生は実習後に優位に好転していた。内田ら¹¹⁾や釜島ら¹²⁾は

「子どものイメージの強さは実習で変化するが、子どもを見る見方は学生本来が持っているものが大きい」と報告している。本研究では実習前後の子どもに対する感情は好転し、特に子どもの接触経験が「全くない」学生は実習後に優位に好転していることが明らかになった。青木ら¹³⁾は「子どもに対する苦手意識が好意的に変化したきっかけは『学生が子どもと関わろうとする意欲』『今までの自分の知らなかった子どもの姿を知った感動』『学生が子どもに関わろうとする手がかりの提供』などの5つ」を報告している。このことから学生は、保育士などの支援を受けながら保育所実習で積極的に子どもと関わり、今まで見たことのない子どもの姿に感動したことでイメージがプラスイメージに変化し、子どもに対する感情が好転したと考えられる。さらに子どもとの接触経験が「全くない学生」は、子どもに対する感情が優位に好転していたことから、学生は子どもとの接触経験が少なくても保育所実習で3日間じっくりと多くの子ども達と関わることで子どもの本来の姿をより理解し、子どものイメージや子どもに対する感情を好転することができたと考えられる。

2. 実習後の子どもとの関係性と実習の学びから子ども観の変化

子ども観の一つである子どもとの関係性では「私にとって子どもは」という刺激文から記述した内容を分

析した結果、元気、癒される、可愛い、大切な存在の「好意的関係性」が7割と多かった。また、吉田ら¹⁾の研究結果と比較すると「好意的関係性」が多く、「非好意的関係性」「希薄な関係性」が少なかった。これは小児看護学の履修前の調査結果と履修後の調査結果であることが影響している。小児看護学履修前の学生は子どものイメージを感情中心のとらえ方をしやすく、小児看護学履修後の保育所実習では講義で習った知識を用いながら、子どもの特性を踏まえた子どもとの関係性を認識できるようになったことが考えられる。小児看護学の講義が終了後の保育所実習について臼井ら⁴⁾は「学習レディネスとしては十分で、学習した知識・技術・態度を実際の事象の中で適応することにより、体験を通して検証、深化、統合を行うことができる」と述べていることから言える。さらに、学生は子どもとの関わりを通して学生自身が癒されながら、「子どもがほしい」「側にいてほしい」など子どもを身近な存在として認識している学生もいることが明らかになった。これは健康な子どもとの関わりの中で子どもから多くを学び、可愛いなど好意的関係性が高かったことも影響していると推察される。

一方、敏感に反応、関わるのが難しいの「非好意的関係性」は7.2%であった。これは一部の学生であるが、実習中に子どもとの関わり方に難渋していたことが伺われる。わがままだけかわいいなどの「両価性関係性」は3.6%であり、一部の学生であるが子どもに対して両価性の感情を抱いていることが明らかになった。これは実習でたくさんの子もたちと関わることで子どものイメージが影響し、子どもとの関わり場面で子どもの姿から感じたと考えられる。近いようで遠い存在だった、未知の人間などの「希薄な関係性」は8.4%であった。これは3日間の実習では子どもとの関わりでの体験が十分にできなかったことが推察される。子どもは常に成長しているなどの「客体化」は7.2%であった。これは子どもが日々成長していることを、子どもとの関わりを通して感じることでできたことから客観的に捉えることができたことと推察される。

次に実習での感想と学びでは、学生が保育所実習で学んだと実感していることは「子どもとの関わり方」が最も多く、実習目標の一つである「子どもとよりよい関係をもつことができる」と一致しており、子どもとの関係性の育成につながったと考えられる。

以上のことから、保育所実習で子どもとの関わりを通して学んだ経験から学生は子どもに対する感情、イメージが好転し、子どもとの関係性の育成につながっており、子ども観を培うことができていた。

今後は、ますます少子高齢化が進む中、子どもとの接触経験が少ない学生が多くなることが考えられる。実習時間の短縮の中で学生の子ども観を培う事ができ、保育所実習の経験が病児を対象とした病院実習にも生かせるような保育所実習のプログラムを検討していく必要がある。

VI. 結 論

1. きょうだい数は平均 2.42 ± 0.77 人であり、子どもとの接触経験が全くない学生は55%であった。
2. 子どもに対する感情は実習前と比べると「大好き」「どちらかといえば好き」が78%から94%、「どちらかといえば嫌い」では3.2%から0%に変化し、特に子どもとの接触経験がない学生は有意に好転していた。
3. 子ども観は、子どもイメージでは実習後「おもしろい」「元気」の得点の平均値が有意に高くなり、「わがまま」「うるさい」「生意気」の得点の平均値が有意に低下し、マイナスイメージからプラスイメージに変化していた。
4. 子どもとの関係性では「好意的関係性」が74%と最も多く、保育所実習で学んだと実感していることで最も多かったのは「子どもとの関わり方」39%であった。
5. 保育所実習で子どもとの関わりを通して学んだ経験から学生は、子どもに対する感情、イメージが好転し、子どもとの関係性の育成につながっており、子ども観を培うことができていた。

謝 辞

最後に、本調査にご協力いただいた看護学生の皆様に深く感謝いたします。

文 献

- 1) 吉田由美, 梶山祥子, 草場ヒフミ, 中島登美子, 田村佳士枝: 看護学生の子ども観 ~ 子どもとの関係性の見方と接触経験の程度と関連~, 日本小児看護研究学会誌, 2(1), 39-47, 1992.
- 2) 草場ヒフミ, 梶山祥子, 吉田由美, 井上映子: 看護学生の子ども観 - 子どもとの関係性, 千葉県立衛生短期大学紀要, 8(2), 109-114, 1989.
- 3) 岸川亜矢, 田村佳士枝: 小児看護学実習前の保育所実習経験の効果 ~ 保育所実習を経験した学生と

- 経験していない学生のアンケートの比較から～, 千葉県立衛生短期大学紀要, 19(1), 7-14, 2000.
- 4) 臼井徳子, 橋爪永子: 保育所実習における学びの分析, 三重県立看護大学紀要, 4, 109-113, 2000.
- 5) 草場ヒフミ, 吉田由美, 鷹平永子: 看護学生の保育所実習における学習内容 - 基本的生活習慣に関して, 千葉県立衛生短期大学紀要, 4(2), 83-93 1986.
- 6) 釜島美智代, 中久喜町子: 小児看護学実習前後の学生の子ども観と実習のとらえ方の変化, 山梨県立看護大学紀要, 5, 51-59, 2003.
- 7) 遠藤芳子, 後藤順子: 小児看護学(幼稚園)実習の有効性の検討 実習前後の看護学生の子ども観と実習のとらえ方の変化から, 山形保健医療研究, 7巻, 33-40, 2004.
- 8) 東野充成, 松木美奈子, 大池美也子: 保育所実習に見る看護学生の子ども観, 九州大学医学部保健学科紀要, 5, 77-85, 2005.
- 9) 高橋恵美子, 高梨信子: 臨地実習による看護学生の子どもに対する関心の変化(1) - 好感度調査からの考察 -, 島根県立看護短期大学紀要, 5, 59-63, 2000.
- 10) 谷本公重, 猪下 光, 緒形美智子: 看護学生の幼稚園・保育所実習前後における子どもへの認知とイメージの変化, 香川医科大学看護学雑誌, 3(2), 7-14, 1999.
- 11) 内田雅代, 古谷佳由理, 兼松百合子: 小児看護実習における学生の子どもに対するイメージの変化について, 千葉大学看護学部紀要, 15, 35-43, 1993.
- 12) 釜島美智代, 中久喜町子: 小児看護学実習前後の学生の子ども観と実習のとらえ方の変化(第2報), 山梨県立看護大学紀要, 6, 57-64, 2004.
- 13) 青木久枝, 門司真由美: 子どもに対する苦手意識が幼稚園実習後に好意的意識に変化した要因, 第35回小児看護論文集, 158-160, 2004.

(受付 2007年9月3日)